

# 上越地方初の大規模脱原発集會に約420人が参加 原発事故で家族バラバラの菅野さんが涙の訴え

6月29日の午後、リージョンプラザにおいて「つなげようフクシマ! さようなら原発 6.29上越集會」が開かれました。集會には原発に反対する様々な団体や個人、約420人が集まり、上越地方の脱原発の集會としては最大規模の集いとなりました。

最初に主催者を代表して挨拶した馬場秀幸実行委員長(弁護士)は、「農業政策や原発問題は国の政治家に任せておけばいいと思ってきました。だけど、私たちは、本当はいやだ、いやだと言いつづけていくことが大事。政治家はこの気持ちを含んで新しいエネルギー政策をつくってほしい。3月11日の被害の実態、現実を私たちは忘れない。福島の人たちと連帯していこう。さようなら、あきらめずに、原発を稼働させないという気持ちを確認する場だ」とのべました。



続いて登壇したのは郡山市の菅野正志さん。菅野さんは、「妻子を新潟市に避難させ、自分は郡山で仕事をしている。家族として当たり前なことができなくなっている。私は政府や東京電力から提供された情報にだけ頼っていたために娘を被ばくさせてしまった。悔やんでも悔やんでも悔やみきれない。長女は震災3日後から鼻血を出しはじめた。東京電力が憎くてたまらない。親として涙が出るだけだ。次女は4月より幼稚園に行くようになった。郡山市に帰る時は、玄関の戸を閉めても、パパ、パパと叫んでいる。耐えられません。私は数分しかこの声を聞かないが、妻は毎週毎週ずっと聞いているのです。辛い」と語りました。原稿を手にたんと語り菅野さんでしたが、心を打つ話に会場は静まり返りました。

集會では、原発訴訟をしている松永仁弁護士から原発を巡るたくさんの方のトラブルや訴訟経過などについて報告してもらったほか、「つなげよう脱原発の輪 上越の会」、糸魚川市地区労働連、新婦人の会が団体としてアピールを行いました。このうち新婦人の会のみなさんのリレートークが集會を大いに盛り上げました。

「私の妹の連れ合いは福島県いわき市の生まれです。生まれた家は津波に流されました。漁業を営んでいた人たちは仕事を奪われました。原発は他人事ではありません。柏崎刈羽原発再稼働なんてとんでもありません。信じられません。原発は大嫌いです」

「私は原発からわずか20数キロのところに住んでいます。放射能は目に見えません。毎日の暮らしが心配です。私も他人事ではないと思っています」

「上越の山間部でヤギや鶏を飼って暮らしています。上越の子どもたちや自然を守りたい気持ちでいっぱいです」

「わたしには二人の孫がいます。輝く笑顔を見ると、子どもたちの将来がどうなるんだらうと心配になります」

「福島の事故もまだ収束していないのに、原発の輸出なんてとんでもありません。死の商人はやめてください」

「原発も核兵器も根っこは一緒です。原発を無くしたい、この思いはみなさんと一緒です」

スピーチには一つひとつ大きな拍手が送られました。そしてメンバーの人たちは最後に壇上で横断幕を広げ、「命を産み出す母親は命を育て命を守ることを望みます」と唱和しました。素晴らしかったです。

集會後はリージョンプラザ周辺をデモ行進、市民に柏崎刈羽原発の再稼働反対等を訴えました。陽射しが強く、私は青いタオルをあねさかぶりしながらデモ行進しました。



【ケンボナシ】クロウメモドキ科の落葉高木。漢字で、「玄圃梨」と書きます。花は白く、秋には小さな実とその根元の木が食べられます。写真は吉川区山方にて撮影したものです。

市役所での用事が予定よりも早く終わったので、先日の夕方、四十数日ぶりに柏崎の母を妻とともに訪ねてきました。家のすぐそばの畑にいた義母は私たちを見つけると、「あんまり来ないので心配していたんだよ」と言っていて喜んでくれました。

三年前に夫を亡くした義母は今月で満八九歳になります。足腰が良くないので、もっぱら近くの畑で大好きな畑仕事をやっています。この日は、ご飯が炊けるまでの間にということ、畑に出て、野菜に水くれをしていました。畑にはキュウリ、ナス、ネギ、サトイモ、大豆、ミョウガ、コショウなどが植えられています。義母は玄關脇の手洗い場からホースをのびし、野菜の一つひとつに水をかけていました。

野菜に水をくれながら、義母はキュウリにかけると「網」の話をし始めました。キュウリは私の背丈ほどに生長し、一〇センチほどの実がいくつかなっていました。「カラスがいじめるんだって……。この間も食い散らかしていったんだわ」

いかにもカラスが憎いといった表情で、義母はそう言いました。キュウリが植えられている畑から二〇センチほど離れたところでは、義兄がイチジクの木にかけてあったネットを取り外しています。これをキュウリにかけようというのです。

水くれが終わった義母は、「さあさ、入って」と私たちに家の中に入るよう勧めました。玄關からまっすぐ入ったところに義母の部屋があります。四〇日ほどの間に部屋の中はずいぶん変わっていました。ベッドの位置が以前とは違ってあります。小さな冷蔵庫が入り、クーラーも設置されていました。

部屋の一角に、これまた小さなテーブルが置いてあって、その周りに座イスが二つあります。その一つに座らせてもらい、お茶をご馳走になりました。

ベッドに目をやると、布団が落ちないようにと、高さ三〇センチほどの手すりがつけられ、それをかわいい布でおおってあります。しかも、その布にはポケットがいくつあつて、テレビ、エアコン、電灯のコントローラーが入れてありました。

「あら、いいもんつけてもらったね」と、私が言うと、義母は、義姉の連れ合いのトシオさんがつけてくれたと教えてくれました。これなら、ベッドに寝ていようと、座つていようと、そこでテレビなどを操作できるし、とても便利です。

義母によると、ベッドの手すりをつけてもらったのには、訳がありました。「トシオさんたちがダブルベッドを買うと言ったから、私、それは止めとけと言ったの。いずれ一人になるんだから、その時、ベッドが広すぎて困るからね。私のように寝ていても行儀悪いと布団落ちるけど、トシオさんたちは行儀いいんだね、そんな分けてくれたの」

ベッドの手すりは義姉夫婦がシングルベッドを購入した時のものだったので、私よりも少し遅れて妻が部屋に入ってきた時、義母は湯呑み茶碗を四つ出し、お茶を注いでくれました。私と妻には白い茶碗、そして残りの二つは何と夫婦茶碗でした。これは柏崎の父が栃木で買って来たものだそうです。

亡くなって三年経っても、お茶を飲むときには連れ合いの分もお茶を入れる、これには驚きました。「もう夜になるし、寝そけるからね。これはあげないの。死んでしまえば、悪いこともみんな、ようなくなってくるもんだ」、そういう義母を食器棚のそばの写真の中から義父が見下ろしていました。

## 中山間地対策特別委が十日町市池谷、柏崎市荻ノ島を視察

上越市議会中山間地対策特別委員会は6月28日、いま全国から熱い視線を浴びている十日町市池谷を訪ねてきました。

コシジシモツケソウが咲く道を登

**上越地域各消防署における空間放射線量測定結果**（測定は毎日午前9時。数値はマイクロシーベルト。1時間当たりの測定量です。消防署によると、通常の範囲は1時間当たり0.016~0.16μSv（マイクロシーベルト）だということです。

	6月19日(水)	7月3日(水)
上越南消防署	0.053	0.033
上越北消防署	0.057	0.050
新井消防署	0.080	0.047
頸北消防署	0.060	0.053
頸南消防署	0.063	0.043
東頸消防署	0.060	0.047
高土分遣所	0.076	0.047
名立分遣所	0.053	0.050

り、「やまのまなびや」となっている旧池谷分校に着くと、特定非営利活動法人十日町市地域おこし実行委員会の多田朋孔さんたちが待っていてくれました。多田さんから中越大震災を契機に大きく変わったムラづくり、山清水米を中心とした農産物の直販、都市との体験交流事業、移住促進、中山間地域の保全をめざす情報発信などについて、スライドを使い、熱く語っていただきました。「一つの集落という狭い範囲で持続可能な社会をつくりだし、全国に広げたい。わたしはこの活動に人生をかけようと思っている」という多田さんの言葉が私たちの心に響きました。

また、この日は、柏崎市荻ノ島も訪問しました。

これまで3万人からのお客様を受け入れてきました

が、最近では減り続けています。このままではいけないと、荻ノ島の今後を探るワークショップをやり、新たな集落づくりをスタートさせました。この日は集落代表の春日俊雄さんから話を聞いてきました。

春日さんは、①茅葺きの景観の保全、②外部人材の導入と若者の定住促進、③小さなブランドづくりを重点に取り組みをしていくと語りました。「最大の課題は、このムラで自活する人を迎えることだ」と語る春日さんの言葉が印象に残りました。



荻ノ島にて